

---

月 刊

---

# MéLange

---

Vol.124

---



富哲世さんと布村マリさん（御着かおりさん提供）

---

2017.06.25

詩と評論

追悼／富哲世・寺岡良信

---

月刊「Mélange」

Vol.124 2017.06.25

「月刊めらんじゅ」編集部

### 詩 & 俳句

振り返る場所／べらぼうな……………木澤 豊 03  
 昭和の子---スモッグ挽歌 (俳句) ……………野口 裕 04  
 パロディ詠 (俳句) ……………岩脇リーベル豊美 04  
 日常 ……………にしもとめぐみ 05  
 一日の理由……………大西隆志 06  
 チロの歌 ……………北岡武司 07  
 蓑虫靴店／アール・シンの店……………かんなで かるも 08  
 うつむき ……………大橋愛由等 10  
 塵 ……………中嶋康雄 11  
 稲妻に撃たれて ……………有時秀記 12  
 ふくろ ……………高谷和幸 13

### 追悼特集

〈続・富哲世追悼〉富哲世さんに……………木澤 豊 14  
 富詠 (俳句) ……………岩脇リーベル豊美 14  
 〈追悼・寺岡良信〉崩壊に堪えるもの ――詩人寺岡良信が逝って二年ののちに思うこと……………有時秀記 15

### 連載／詩評・エッセイ

神戸詞あしび 113 「亡くなった富さんの貴重な朗読録音発見」……………大橋愛由等 16

編集部だより★43／詩友の永遠の旅立ちを見送るのはいつも辛い。われわれの大切な朋である富哲世氏が2017年5月26日〈金〉午前7時30分ごろ急性呼吸不全のため神戸市東灘区にある甲南病院東館2階2216号室にて逝去された。享年62歳。医学が発達した近年では若死とも言えるかもしれない。今年3月に手術をしてからも「月刊めらんじゅ」に新しい詩評の連載を始めるなど、生きることの意欲は充分みせていただけたに、残念である。死去を知らされた26日の翌日が通夜、28日が葬儀だった。仕事の都合で通夜には参加できなかったのも、葬儀に間に合わせるべく、26日中に友人たちに電子メールで、弔辞ないしは追悼作品(詩、俳句)を寄せていただくよう依頼した。たった一日しか執筆の時間がないにもかかわらず多くの友人たちから追悼文や作品をいただき、それらをまとめて「月刊めらんじゅ」特別号として編集して葬儀会場に望んだ。富さんの遺体の前で、追悼文ないし追悼作品を朗読したのである。(後日、富さんに寄り添って生きてくれていた御着かおりさんから、富さんの写真などを提供していただいた。感謝します)。この別れの辛さはこれから永く深く続いてゆくことだろう。(大橋記)

### ◆振り返る場所

木澤 豊

いつもの場所で  
ふと〈振りかえった〉  
そこに 二股のどでかい檜が聳え  
空に でかいミルクの川が走っている  
〈振り返った〉のがいけなかった  
木かげの小屋に灯りがともし  
影が動いた

そう そこが そこであるのかどうか  
いま いまであるのかどうか  
ふと へんだなとおもったとき  
その 道はひらいていた

いちめんの落ち葉で  
黒い玄武岩がごろごろ落ちていて  
叩けばつるつる肌理がでるが  
暗くて見分けられない  
そこには二十年前のわたしが立っている

ワタシデスカ  
ソウデス  
ドコカラキタノデスカ

いや 千年むかしからいたのではないか  
なにかの拍子に足を踏みはずし ここにいる

のじやないか

ワタシハ 足ヲ 踏ミダシタケレド  
ケツキヨクハ ココデ  
ホソイ竹ノ箸デ ツメタイゴハンヲタ  
ベテオリマス

〈振り返った〉のだから

きょうは 風がガラスみたいで  
落ち葉の 腐ったにおいがする  
ポケットから 小さなライトを出して  
なにかが ちいちい泣いているいつもの小屋に  
帰るほかない  
あるのかどうか わからない小屋へ な  
あの 影の ところ

### ◆べらぼうな

木澤 豊

だれも歩いてやしねえ  
おれだけ

国道の側溝つても 枯れたドブだが  
ぎつくりしゃつくり 歩いてゆく  
双こぶ山が 灰いろにかすむ  
じつは上々天気で  
壊れかけた工場を区切る溝に  
赤い野花 黄色い野花がひらいて

ただしくは いろいろ名をもっているが  
どうでもよくなっている

テツドグサ アキノノゲシ ヒメジョオン  
ブクサ スイバ ツメクサ スベリヒユ  
などなど  
咲いたり枯れたり咲かなかつたり

車の埃をかぶって煤けちぢれた  
花は な  
咲いているだけ

歩いても走つても だろ ほこり舞い踊り  
とおく二上山もかすんでおる  
そうだった オルという織り人が籠に住んでい  
たが  
いてもいなくても オルはいる  
ひとり 歩いていく  
そのひと

やまと葛城の地図を見ると

それだけが わたしと言えるか  
名をおとしてきたひとが  
颯爽 金つつくさく錆くさい工場町へ

疾風  
べらぼうめ

べらぼう 遍良坊(慶長2(1597)年生、寛文6(1666)年没)が語源らしいと、書物に記載されている。

◆昭和の子——スモッグ挽歌

野口 裕

泡立草屑鉄売れるという噂  
しよぼしよぼと蝶の渡るや植木市  
学校に上がる前の子ガム落とす  
入墨がシャブとのたまうオリオン座  
喘息の子 罌粟殲滅のポスターに  
鯛焼の頭をもらう骨を噛む  
灰皿の狼煙どもまで細くなる  
鉛筆の芯突つこめば五円玉  
小さなテレビの小さな歌手に種痘痕  
乾いた匙に湯で練る前のはったい粉  
メリケン粉とだいどこに声大根切る  
ガスマン引き回す葱の切っ先倒れる  
藁塚が燃え落ちた 空気銃の音  
うどん屋の看板めしのしが長い  
ええしの子白く大きな捕虫網

◆パロディ詠

岩脇リーベル豊美

赤マロニエ白マロニエ戦没者追悼の鐘  
こころ純粹ならば落花流星となるらしい  
薔薇花びら押し花の痕胡蝶かな  
一面の菜花霧木立に見え隠れ  
五月雨は音声と文法の氾濫です  
學問の春寂寥や葡萄酒の無  
海に出て夢ばかり愛する人もなし  
芍薬の白愛でており夜もすがら  
ぬばたまの夜目に逢う鳩しきりと啼き  
今言うかむかしおいらんなきましたって

◆日常

にしもとめぐみ

6月の美しい朝に  
飛び込み自殺  
空は青く透き通り  
時折白い雲がたなびく  
爽やかな風を受け  
洗濯を干している  
救急車はけたたましく  
救急隊員は迅速に  
ニュースでは警察官が家族を殺害した  
しかし  
朝の食事の時間だ  
生きてるわたし  
生きてるあなたに  
明日は続く

大西隆志

41

死者の唇を動かせる者の学びの知  
砂漠の植物のよみがえりに記される血  
語られる物語に根を張るのは悪意の滲みる土  
上手斜めに日を浴びる木苑<sup>ミズク</sup>の意匠の予知

一人は忘れやすいのでメモ帳を手にする日々  
一人は殺したのか、殺されたのかと自分の手が麻痺  
一人は読み解く、草に覆われた日付けが刻まれた石碑  
一人は食事を作りはじめる、天日と起こした火

42

背後からの自分を見るのか、横顔から見るのが基礎  
となる、写真家ではない観察者の落としていった過疎地の糞  
ヒ素に囲まれた時代の泣き声、避難区域の道路、つながる臍の嘘  
誰のために、美しい子どもの足裏をくすぐるのがミソ

失われた川、とは地表から消えた伝承の吐露  
一瞬のうちに川は蒼穹の彼方に去り、痕跡の色はいろいろ  
墓石の前で殉じたのか、川を下つて来た一尺四寸の脇差の黒いテロ  
血腥い川を渡るのは揃いの白地で武装、それでもそろりと反れる

43

精神の光にて笑うのは誰でしたかね、くつろぎの湯  
浸すのは知らないことだらけ、小僧につきそう比喩の粥  
若い女の食膳には水墨の霞に泳ぐ鮎  
梅雨はまだかしら、冬に引かれた白湯の眉

囚われた者たちはどこにも行けぬ  
山中での朝の散歩、ケモノ道を踏みしめる猫と二匹の犬  
ダムのために沈んで消えた地の名前の上を進むカヌー  
小糠雨に濡れた絹と漉きあげた和紙は閉じられ前に死ぬ

44

45

46

◆ 千口の歌

北岡武司

千口はげんきだよ  
車にはねられたのに  
うしろ脚がないのに  
はしりまわるよ

車輪つきの板を  
ひぎずつてはしる  
うれしそうだよ  
千口 よかつたね

だれのかおでも  
よろこんでみあげ  
からだとしつぽで  
わらつてくれるよ

うれしきはふしぎ  
どんなにうれしがつても

なくならないもの  
草のおいにうつとり

しろい毛のかたまりが  
おとをたてて  
はしつてくる  
ああ とびつくよ

いのちはふしぎ  
どんなにかなしくても  
いまをよろこべるもの  
うそがないからかしら

かおをなめられると  
そのげんきがうつる  
ありがとう 千口  
かなしくないのかい？

千口 おまえはえらいよ  
おまえみたいになりましょう  
草の香りをよろこびましょう  
悲しみも・・・よろこびましょう

## ◆ 蓑虫靴店

### かななでかるも

蓑虫靴店は夜にならないと見えない。その風変わりな靴屋は真つ暗な崖に張り付いて建っていたが、暗い夜道にそれを見ると店は崖の中にめり込んでいて、まるで洞窟のように見えた。靴屋の親父はさしずめ冬眠中の熊と言ったところだ。店先には絶えず木の葉が落ちてきていた。掃いてもほいても雪のように降ってくる木の葉を親父は掃除しようとはしなかった。軒にもその下の小さく張り出したテントにも濁いた枯れ葉が降り積もり、何か巨大な生き物がその下に隠れていて、蓑虫靴店はそのうちもつこりと立ち上がるのではないかという印象を与えた。

店先に立ち止まると真つ暗な崖の中に明るい窓が開き、その光の部屋の中で靴屋の親父はごそごそと仕事をしていた。時々立ち上がり、こちらを伺っているように見えたが、人目を気にしているわけではなかった。ただ風の具合やら空模様が気になるらしく、時々顔を出して外気を感じとるだけなのだ。恐らく天候は皮職人にとつては大事なことなのだ。しなり具合やら伸び具合は湿度によって微妙に違ってくるに

## ◆ アール・シンの店

### かななでかるも

銀色の葉の茂る並木道を上ると小さな広場があった。そこから先の坂道は北の山脈を目指していた。大きな立て看板が行く手を阻むように朽ち果てていた。林道の地図らしきものが僅かに読み取れたが、地図の下には太い黄色で塗られた山麓道路が横一直線で延びていた

「裏道だね」と僕は言った。

「でも、町からは近いからいろんな人がここに来るのよ」と彼女はいった。

「変な地図だったよね。あそこには山の地図しかなかったよ。なんで町の地図は書かれなんでしょう」

僕たちは山麓線を少し東に入って、そこから少し下った。

「地図は単なる目印なのよ」地図を見ないで彼女はさつさと先を歩いた。

街灯もないこの街は、電柱にぶら下がる裸電球によってのみ照らし出されていた。見上げると、家々は崩れながら改築されつつあり、屋根も壁もささくれだつて、あちこちに穴が開いているように見えるのだ。倒れかけた柱や今にも落ちそうな梁は、そのまま番線によって固定されている。家を突き破る黒い柱は、下から街灯に照らし出されて、凶暴に震えながら夜空に突き刺さっていた。それらの黒い影がこの街の風景をずたずたにして、貧乏神のように僕たちを見下ろしていた。

「ねえ、もうすぐ行くとアール・シンの店よ」と彼女は言った。

道路は腐った食用油にまみれて滑りやすかった。だがここまで彼女に連れてきてもらった以上、引き返すわけにはいかない。アール・シンの店に入らなければならぬ。「ほら、ここがアール・シンの店よ」と言われて、僕は慌てて空振りのノックをした。滑らかな黒塗のドアと間違えて暗闇を叩いていたのだ。この地区の店のドアは本当に真つ暗な入口から少しばかり入

り違ひなかつた。そして何よりも靴職人は自分の体を気候にあわせておく必要があるにちがいない。靴屋の肉体は自然と不自然の中間にあり、湿度や体温を絶えず死んだ皮に与えていかなければならなかつたからだ。

寒い日にはオレンジ色の室内はまるで暖炉のように見えた。真つ黒な靴職人のシルエットは炎の中で燃えているように見えた。親父が立ち上がるのと得体の知れない怒りが谷一面に立ち込めるような不思議な緊張感があつた。

蓑虫靴店は夜汽車の窓からも見えた。帰宅の際、僕はその辺りまで来ると通勤列車の入り口の窓に張り付いて目を凝らした。列車が港を通りすぎて崖に張り付き海岸線ぎりぎりを走り始める辺りで、一瞬だが蓑虫靴店は現れる。僕ははその一瞬を待っているだけで胸がときめいた。真つ暗な闇の崖の中にその光の部屋は一瞬現れる。一瞬にして永遠の残像が僕の脳裏に焼きつこうとする。蓑虫靴店は崖の中の宝石箱のように絶対的な王国の姿を僕に射し示そうとしていた。

僕には蓑虫靴店が王国の入口のように思えて仕方がなかつた。その王国に入るには簡単な方法がある。蓑虫靴店で特別な靴を注文してクライアントになればいいのだ。そう思つて僕は坂の途中の斜めの蓑虫靴店に入った。革の匂いが昔好きだつた女の背中の中の匂いに似ている。この店が気に入った。靴屋のくせにサンダルをはいている親父に対して、僕は好きなように僕に

つたところにある。ところが、空間は横に延びて、いくつも店の並ぶ通路が続く、アール・シンの店はすぐには見あたらない。小さなネオン文字の看板が何処までも続く。ネオンの下には申し訳程度のショウ・ウィンドウが続く、汚れたガラスに次から次に僕の顔が現れて、理由のない笑いに満たされながら消えてゆく。

「ああ、やつと、ここだわ。アール・シンの店よ」

ガラス戸の一つを押してみる。僕の顔は彼女の顔と連れだつて反転し、闇の世界に裏向きながら入つていった。

やがて、白眼をパチパチさせながら、インド人の給仕が近づいてくる。

「メニューをどうぞ」

「暗くてよく見えませんが」

「では、蠟燭をどうぞ」

だが、しばらくすると目が慣れてきて、窓の外が結構明るくて、蠟燭なしでも何もかもが見えてきた。

窓の外には、肌色に輝くサーカス・テントが浮び上がってくる。何時の間にか雨が降り始めたらしい。蠟燭の光が窓ガラスの水滴に反射して輝いている。それにも関わらず、丘の上の広場はサーカスが賑やかだ。

僕たちの静かな食事も始まつていた。

「はい、これがインド野菜です」

「それから、これがインド野菜です」

彼女の舌の先が、毛筆のように料理の表面を味わっている。どういう訳か彼女はなかなか飲み込めない。外ではサーカス・テントの修理屋が、弛んだ布の上を這いながら雨漏りの箇所を捜している。テントは反り返る女体のようにその中心を虚空にぶらさげて、だらりと四肢を地面に這わせてロープで杭に繋がれている。テントの中央には空洞があいている。その、臍を貫通して大空から一本のブランコが垂れていて、ブランコ乗りの少年が盛んにテントを揺り動かしながら、体内を舞っているようだ。

暗闇の中でそれに見とれながら、食事に熱中していると、彼女は何時の間にか眠つてしまつていた。彼女の口の中では食べかけの肉と野菜の香辛料が上手く混じりあい、なんとも表現し難い香ばしい旨みが生まれている。

一人だけの食事は味気ない。彼女の口からペースト

合う靴を作ってくださいといった。親父は頷いて僕を椅子に座らせたり立たせたりしながら採寸した。その間中、僕には店の奥のほうの気がなつて仕方がなかつた。

店の奥にはたくさんの靴が並んでいたが、それは修理を待つ靴には見えなかつた。大勢の人がそこで靴を脱いで階段を上り、何かの集会をしているに違いないと思えた。

「この上にはたくさんの方が住んでいるのですか。たくさんの方が並んでいますね。」

「そうだね。直しようのない靴ばかりだ。」

「じゃあ、捨てるしかないのですか。」

「修理がすむまで上にあがつて待つてもらっているだけだよ。ここは靴屋だから。」

「じゃあ、捨てちゃあだめなんですね。」

「そうだよ。また帰ってくるからねえ。」

「へえ、でも、仕事を急がないと上で何時までも待たされることになるのですか。」

「いやそうでもない。新しい靴を作つて上にあがつた客は別に降りてこなくてもいいんだよ。放つておいても入口に帰ってくるからね。」

「じゃあ、靴の修理を待つ人は、靴がないから入口に戻れないじゃないですか。」

「いや、もう靴がいらなくなつて帰らなくなつただけだよ。だけど、帰つて待つしかないだろう、ここは靴屋だから、二階は真つ暗なんだ。」

状の総てを奪い取ると、僕は、表皮を剥いだばかりの柔らかなインド無花果を握り締め、彼女の唇を開きながら、少しずつ回転させた。紅色の果肉からにじみ出る果汁のはじけるような芳香が、彼女の淡紅色の鼻腔に緩慢と吸い込まれ、僅かばかりの鼻毛も見えるほど、うっとりとした鼻腔を膨らませ、彼女は掠れるような吐息を吐く。さらに、僕は彼女の息の根を止めるため、喉の奥深くまでインド果実を突っ込んでゆく。一瞬彼女は悶えて両眼を見開き、朝顔のように光彩を解放にすると、ぐつたりと汗ばんだ身体を皿の上の肉の形に似せた。

果実の総ての細胞が喉の奥で潰れ、炸裂音が彼女の全身を震わせている。総てはジャム状だ。小さな種子さえも粉々にする消化音を聞き取るため僕は彼女の下部を剥き出しにしてテーブルの上で反り返らせた。そこに耳を沈めながら再び僕は外を見た。

雨はまだしとしとと降っている。もう、サーカスは終わりにかけている。テントを照らすサーチライトも一つずつ消えていく。

だが、テントの中には溢ればかりの光が満ちていて、そのためテントは肌を火照らせながら、再び闇の中に身を反り返っていた。夜は限りなく墜ちてくる。あるいは、サーカスは限りなく夜に向かって浮き上がっていた。

雨の中では、子供たちが「サーカスの狐が逃げた」と騒いでいる。

僕たちの静かな食事も終わろうとしている。濡れた窓ガラスには、彼女の裸体が浮き上がろうとしていた。二人とも裸を見るのは寂しかった。消えかけた蠟燭は狂つたように燃え上がっている。

「もう、お済みですか？インドお料理は如何でしたか？」

再び現れた給仕は、しつかりと片目を瞑りながら、食器類を片付ける。何回もテーブルを巡りながら、その目は決して僕たちを見なかつた。窓の外のサーカスも何時の間にか雨のなかに消えていた。テーブルの彼女は、やつと目を覚まし、潰れてしまつたインド無花果を腹の上に塗りたくつていた。

アール・シンの店は僕たちが帰るまでその鮮やかなネオン文字を消さなかつた。

◆うつつむぎ

大橋愛由等

翅が閉じられないわたしと朝

(夜行列車が残月から逃れようと西へ奔つてゆく日の出の街に黒鳥たちが予定調和なまなざしをかわし「無残な一日」とだれかに語りかける時。そこを歩いているのは昨日の失念なのか杖をついて昨日の横線を語り昨日の液化をとうとうとなじつて友人たちの眼の前で引き戸を閉めたその時。十年ぶりに失語を解いたその女がけらけら嗤っているのは芽吹いたばかりの若葉が忘れ物を思い出して逡巡しているさまのおかしみであるとうやく気づいたかの時。坂をのぼっていたら坂をくだつてゆく人から「きみの長い髪はだれが食べてしまったのかね」とすれ違いざまに尋ねられ「樹木の湿度はその日の明朝体で決まるはず」と応えたそんな時。運命の配分を決めるのはミトコンドリアの策謀だなんてどこの誰が記述しているのか調べているうちに書物の迷宮から抜き出てこれなくなつたかつての友人をふと回顧していた時。わたしの横に立つてカーニヤを呑んでいたダダと語るうちに「ぼくのモノトーンはアヴァンギャルドを気取っているんだ。わかるかい」と念を押す執拗さに「そうさきみのモノトーンは石が苦水と出会つた時のためらいさ」とうつつむぎながら返答したあの時。去つていつたあのひととあのひととあのひとたちのカイエの続編はもうないのだいいうことの言触れに今日の午後は泣いてくらすことにして涙をためる志野焼の器を探そうと立ち上がったこの時はいくつかの時と時がもつれあいぐもりあいあらがいあいながらかさなりあつている時だということ……

◆塵

中嶋 康雄

塵がふらふらまつている  
なにかがわらつているし  
意味なきいてもむだらしい  
塵のまねをすると  
いちばん話ごとおりやすい  
塵のまねなどしたこともなく  
どうすればよいのかさっぱりわからない  
おしえてくれない  
雨は降つてくるし  
雷は鳴るし  
給料は待つても待つてももらえないし  
ほんとうに塵が給料をもらえるのかも  
さっぱりわからないけれど  
そもそも塵になつてしまえば  
腹もへらず  
住むところもいらす  
服もいらさないから  
「塵になろう」  
とそこいらの塵にさそわれて

「それじゃあ、まあ」  
と頷けば  
塵にぐらいはすぐになる  
と思うが  
中途半端なまんまで  
まだまだ塵にはならないし  
なにもものにもならないし  
今までどおりに  
腹はへる  
すぐそこを通り過ぎるもとの仲間  
声をかけるが  
「助けてくれ」  
と声をかけるが  
なんだか塵がガサコソいつている程度の  
反応しかしてもらえない  
「塵にちかづいている」  
とよるこんでいいのか  
とにかく腹がへるので  
かなしい  
塵のなりそこないで  
まだまだかさばるし  
そもそも歯も口もなくなつて  
どうしようもない  
名前もわからない鳥が  
そばでやつぱり塵になりかけているので

「おまえはいいな  
虫が食えるから」  
と言うと  
塵になりかけどうしのよすがで  
鳥が虫をくれるので  
その虫を己の穴に突つ込んでみる  
腹がへつているのは  
虫も同じで  
虫に食われて  
穴がまた大きくなつてしまふ  
こういうふう  
ぼろぼろになりながら  
ぼらぼらになりながら  
だんだん塵になるといふのなら  
つらいから  
もう  
ひきかえしたいが  
ひきかえせるはずもない  
まだまだ中途半端で  
人ともいえず  
塵ともいえず  
そこらへんに  
散らばつて  
横たわつている  
風がふく

高谷和幸

古いちかてつに乗って3にんの友人と出かけた。せまいそうじじようは、しばらくして5にんの詩人が加わりいつぱいになった。意味のない「うけとり」すりつとの『口元』が軌道を飛び越えた「惑った星」の「太陽の死」をおもわせた。わたしたちの「ととのえる」しぐさを「太陽の死の後」のもとにどのように伝えてあげられるのだろう。皮膚のうえから出入りを繰り返す「昆虫くん」がその厳粛な儀式のお手本かも。「ここであなたを待っていました」というキャラじゃないけど「あかさびたうみがなみうつきわで、青いインク瓶と貝殻があるのがDoyの星だった。とぐちをおしひらき、「はいらせていただきます」「あれは午後の五時だった。きつかりと五時だった」この時間はきみのなかにもう存在しない。一本の火柱がすくつと立っているのみ。ひかれた光の線がわたしたちの「過剰」そのもの。「有機体の時間」ととのえる」が焔の立ち姿をなぞつてのぼつていく。ことば（ミメーシスとよぶ「儀式的行為」）はかえりぎわにわたされたふくろ。ふくろの中には「死んだ猫」テロリスト」か「生きている猫」テロリスト」が入っているが、わたしたちには分からない。わたしたちのうちの誰かが最初にふくろの中を見ようとしたときにそれは「死んだテロリスト」猫」か「生きているテロリスト」猫」かがわたしたちのふくろに同時にそんざいする。

boyからもれでた声は「昆虫くん」の羽のおとかもかもしれないが、同一の有機体を構成する音（なみうちぎわから）おしよせてくるしずかな「エコー」だと思った。わたしたちは聞かぬがわにいたのだ。誰

かが言表することを「ととのえる」の彼方にあつて、黙ったままの「いしぎ」の求力や斥力のまぎった空間をさまよっていた。「惑った星」のboyを内包するわたしたち（この複数人称の危うさを身におきつつ）、ニュートンの表現を借りればからつぽの「ぶたい」と言われる「空間」、気象用語では「すつきりとおもわずくちにだす」とした「空間」で、キャストの9にんがいた。駅からは1台のタクシ―に乗って、（1番目の空間）。かそうばにいったのは3台ののりもで、帰ってきたのは1台ののりものだった。（3番目の空間）。帰りに呼んだのは2台のタクシ―だった。最後に残ったのは7にんだった。（4番目のシーン）。「ぶたい」はなにもわからずにはじまつていて、けつごうしながら欠損していく。緞帳の裏の若かつた「やまい」とか、きれぎれの記憶の海が叫びを上げている。その時、椅子にすわっていた「ふくろ」。わすれる危機がしのびよる「ふくろ」には、「死んだテロリスト」猫」か「生きているテロリスト」猫」の消滅（生成変化）するさいこの「ぶたい」があつた。

## ※詩的な思考実験

一九六九年二月二十三日、ミシェル・フーコは「作者とは何か」という講演をおこなつた。切り出しのすぐあとに、フーコはベケットからの引用をしている。「誰が話そうとかまわらないではないか。誰かが言ったのだ。誰が話そうとかまわらないではないか」。彼が言いたかつたのは書いてる主体が消滅することをやめないでいる空間の開示である。ここでは先の引用とは皮肉にも一つの矛盾を孕んでいる。匿名で顔がなままとはいえ、言表されたものを口にした誰かがいるのであつて、その誰かがいなければ、話す者の重要性を否定する主張が定式化されえないのである。

ジョルジュ・アガンベン『瀆神』を参考にしして

## ◆稲妻に撃たれて

有時秀記

「たとえばこの世に触れる瞬間の間に消滅していく音像の一瞬一瞬を共有しようとする」ために、美術家・加納光於が作製したカラーリトグラフ連作「 $\wedge$ 稲妻捕り」(Ryments)を私が目にしたのはもう三十九年前のことだ。そして意識の下に沈んでいた「稲妻捕り」の言葉とイメージに触発され、そのイメージの変容を求めて、高い山に向かい稲光の撮影を試みようとするカメラマンがいる。私とは双子のカメラマンである。雷の鳴る音が遠方に聴こえるのが、僥倖であるかのように、彼は山の中腹の樹木を背にカメラをかまえ、稲光を連続撮影しようとするの時を待つ。

なぜ彼が $\wedge$ 稲妻捕り $\vee$ の記憶をよみがえらせたのか。当然のことながら三十九年前に目にしたものはカラーのリトグラフ連作であり、前衛美術家が美術的営為によって作製したものである。この記憶のよみがえりは、彼の心の細い糸にしかつながらっていない。彼の「稲妻捕り」への志向はむしろ異なる

理由による。その理由の確かなものを求めて、彼はいま稲妻の連続撮影を試みようとしているのだ。……やがて日が落ち、遠くに稲光が走り、疾り、はしる。日没とともに彼の「稲妻捕り」は佳境に入り、撮影は無事終えたことで「稲妻捕り」の現像を下山後に残すのみである。山麓に向かい歩く姿は、手もとの懐中電灯に照らされ周りの樹木に反映しているが、そのうちカメラマンの姿からゆつくりと古代人のような衣服に変わる。山麓では夢遊病のような歩みとなり、奇妙なものを見る。三人の人影が見え、一人は悲しみもだえている。その人が語る言葉も聴こえる。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい」。そしてその人は前に出て、うつ伏せになり、祈っていた。夢遊病のような意識もうろうとしたなかで、彼は声を掛けて聞いた。「ここはどこですか」。三人のうち付きましたがる一人が言った。「ここはゲッセマネです」。その瞬間に人影は消え、彼はもうろう状態から覚めつつ、耳に聴こえた言葉を反芻してみた。「ゲッセマネ、ゲッセマネ」。……古代人のような服はまた元通りのカメラマンの着る今ふうのものに戻っていた。

その時、山麓に稲妻が走り、彼のたたずむ傍の樹木に雷が落ち、彼の身体にも稲妻の電

流が走るのを、意識の底で感じ、そのまま転倒したが、転倒の瞬間、「これが私の稲妻捕りの本質なのか」という言葉が心の内に響くのをかすかに聴く。意識が回復し、数日のうち、彼の知人が面白い話をするのを静かに聴く機会があつた。知人は言った。「身体全体がザザッと変わるような体験をしたときがある」と。彼は思う。それもまた知人の「稲妻捕り」の瞬間ではないのか。これらの現象は何を私に知らせているのか。かの古代ローマ市民が稲妻に撃たれたような、この現象は何を意味するのか。稲妻の連続映像を現像しながら、彼の思念に浮かんだのは「これらの現象が示すのは、真正なロゴスの声を聴け、ということだ」と。現像した写真群には稲妻の種々の相貌が写っている。それは自然現象であるが、その外界の自然現象が身体を媒介に内なる生命を打ちならす。その打ちならしとともに、「 $\wedge$ 世界はロゴスで出来ている」ことを稲妻のような狂性をもって認めよう。それが内なる真正の生命だからだ。そしてつぶやく。「さて、夢の言語を解明しに行こう。私自身のゲッセマネまで行き、完全言語で成り立つ内なるパベルの塔を狂性のなかで想像しながら……。それが残された私の神秘の仕事だ」。

◆ 富哲世さんに

木澤 豊

だれかとへどこかへ行こうとしていた  
 ゆうぐれのようなだった

石畳を打つ杖のおとは  
 そらみみだったか

にぎやかな店通りを抜けると  
 億年のうちの今生は  
 坂道だったけれど

石に当たる杖の響きは  
 胸のあたりを 突きぬけた  
 陽がさしていたとおもう  
 鳩が飛んでいたとおもう

◆ 富詠

岩脇リーベル豊美

永遠に屈服しないための青アネモネ  
 告知なくキリスト昇天の阜月に逝く  
 残春の窓きみ亡きあとの林檎かな  
 平凡だけど先に死んだ詩人が待つ  
 籬罌粟となり訣別の風を写真に撮る  
 もうあかんかもと黙りこんだ完熟トマト  
 ルカだったかな手術前夜のゲッツエマネ  
 ベニテングダケが浄土によつきと湧く  
 悪いけど絶筆はあの一行だと思ってる  
 獅子座の暦安らかにぶにぶに  
 海豚のトス巨大ポールは避けるが当たる  
 夢違え巨大な哲という印現る  
 肉死んで寄り添う猫の温みかな  
 矢沢永吉バーで飲むと蘇るゴリラの眼  
 わたくしを和輪と呼ぶひとりが逝った  
 死の床やヴィザなし入国可の透明人間  
 水際なのに跡形もなく何故も残らない  
 越境型願いごと届け屋根裏で叶え  
 生きたいから詩を書かぬと逆説は三月前  
 アカウントを三つ残したまま何処に隠れた

寺 岡 良 信 追 悼 作 品

★ 崩壊に堪えるもの

—— 詩人寺岡良信が逝って二年ののちに思うこと

有時秀記

「身の龜裂を軋ませ  
 崩壊に堪えるものよ」  
 と歌った詩人が、二年前に冥府に旅立ってのち、  
 世界は以前にも増して崩壊に堪えている。

日本の詩的言語のしい生成を目指し詩作した人を詩の友として  
 持った日々は、確実に遠ざかりゆく。しかし、『ヴォカリーズ』『凱  
 歌』『焚刑』『龜裂』の四つの詩集を置き土産とした人の美的なる詩  
 的言語への道は後続するだろう。どんな変形し、偏った詩的言語で  
 も逝った詩人は後につづくのを待ち望んでいるだろう。それが美的  
 ログスの道を刻むものなら、なおさらのことだ。

四詩集のページの至る所に、あなたのポイエーシス（詩作）で彫  
 琢された日本の言葉の美しさがある。音楽的な美しい詩的言語が無  
 の出入口にはある、ということの旅立った詩人は指し示している。  
 あるいはこうも言える。星の無限と物の夢幻を美的ログスの探求の

根拠として、言葉の彫刻家として詩作し、かつ思索した詩人があな  
 ただ。美的なる詩的言語こそは、パイディア（教養）の初めにして  
 終わりに位置するということも可能だ。

あなたの詩集の題名『ヴォカリーズ』、母音だけで歌う。この言葉  
 は音楽の話だが、詩的言語の話ならば、母音だけの『原語』を創造  
 する詩学の道が、詩人寺岡良信の歩んだ道だろう。「唯物論者として  
 死んで行く」のを是としたあなただが、その言葉は骨と灰になるこ  
 とへの潔さでもあり、諦念でもある。しかし、詩神、ミュージズの女  
 神はあなたの道を照らしつづけるだろう。『原語』の探究者の一群の  
 なかに詩人寺岡良信はいる。

そして、私は生前のあなたとひとつの默契を交わしたことを記憶  
 する。この默契はいまでは私の『《原語》探究』の契機の一つとしな  
 ければならないものだ。

第四詩集『龜裂』の「龜」の文字は古代の呪性を感じさせるが、も  
 ともと呪性を有した太古の女神は亀裂、分裂して、「瞑想」と「記憶」  
 と「歌」を司った。四つの詩集はそれら古代の権能を彷彿とさせる  
 詩的な言葉を痕跡として持っている。このような詩人寺岡良信の詩  
 作の精神は、心ある後続するものが受け継いでいくだろう。



# うた 神戸詞あしび

113-2017.06.25 大橋愛由等



2007年のロルカ詩祭で  
朗読する富哲世氏

付加え  
ることに  
し、加えて  
六月の特  
集テーマ  
は「追悼」  
としたの  
で、神戸で  
展開され  
た詩の朗  
読をリス

も愛されるために。  
残された詩友たちで富さんの遺作集を上梓できるかどうか検討を始めようと思っている。富さんの作品がこれら

再製く磯田ふじ子に 富哲世  
焼き場の炉をあげ横たわる／愛のかたちの骨を入れ  
／／仕出し弁当を食いながらこじれた時間をこいちじ  
かん／山には山の祈りがあり／／駅員風情の折り重む  
／お辞儀横目に炉をひらくと／／ほかほかの／布村マ  
リや磯田ふじ子の／この世の死体の出来上がり

に対する豊かな想像力と、つねに死者とともにある共時性がある。葬儀のあと、富さんと信頼関係で結ばれていた御着かおりさんから富さんが写った写真と詩稿の一部を送っていただいた。

## 亡くなった富さんの 貴重な朗読録音発見

の真摯さを学んだことは  
多々あったのである。  
富さんの詩はいくつかの  
作品傾向がある。そのなかで  
通底しているのは、詩に向か  
う態度のひとつとして、死者

ここにないだろうと最後にのこしていたMDをディスクに入れる。あった。富哲世さんの声が鮮やかに蘇る。第四回ロルカ詩祭（二〇〇二年）で富さんがロルカの作品「イグナシオ・サンチェス・メヒアスへの哀悼歌」を熟っぽく朗読している様子が録音されていた。伴奏は琵琶奏者の川村旭芳さん。和楽器との相性もいい。富さんが元氣だったころ、ロルカ詩祭の呼び物のひとつが、このロルカの長い詩作品の朗読であった。その朗読はいちど聴くと深く魅了されるレベルの高いものだった。詩祭の様子はすべて録音していたわけではなかったが、残っていた音源をさぐってゆくと、この貴重な朗読を見つけたことが出来て、小躍りしたのである。これで富さんの絶品の朗読を後世に遺すことができる。

この朗読音源を、わたしが番組パーソナリティを務める神戸・長田のラジオ局FMわいわいに持ち込んだ。わたしが担当する番組「南の風」で紹介するためである。この番組は奄美のシマウタと文化を紹介するコンテンツであるが、去年の四月から神戸の文化を紹介する内容も

ナーのみなさんに聴いてもらおうと企画したのである（詩の朗読はFMわいわいのサイトから聴くことができる）。詩人・富哲世（一九五四―二〇一七）。われわれ「Mélange」の詩友たちにとって大切な詩友であり、現代詩とともに歩んできたその生き方は、ふかくわたしに影響を与えてきた。毎月開催してきた「Mélange」例会での富さんの詩評はするどく、時に哲学や評論の概念を応用して語るさまは、詩評とはかくあるべきものと感嘆の対象だった（合評が生ぬるいコトバの交換に陥った時、富さんの「ちゃぶ台返し」のよいうな全否定の言辞が表出され、そこにいる詩人たちはハッと我に返り、詩を論じること

詩と評論  
月刊「Mélange」Vol.124  
神戸

2017年06月25日 通巻124号★  
発行所／月刊「Mélange」編集部  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F  
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）  
maroad66454@gmail.com  
定価600円(税別)